

か小石川植物園に唯一株あつたハギで今は枯死していない。昭和二年發行拙著日鮮萩類の研究に新種として記載した摹片の針狀に尖る種である。昨年伊延敏行氏が阿波名西郡旭丸山で採集し始めて野生地の一つが確められた。

477) ヒメハギの一品で花が最初から綠のものがある。摹は先が白く花瓣は淡綠で先が綠である。宮崎縣南那珂郡吾田の草地に自生して居るのを採つた。セイクワヒメハギと命ずる。

478) 伊豆大島のイタヤカヘデは葉型が同じ枝でも種々に變る。葉柄は紅色、葉身は5-7裂し裂片は披針形で長く尖る。5裂するものは基が或は丸く或は廣楔形、7裂するものは基が截形である。夏は綠で秋遅く汚れた帶褐黃色になる。之をナバケイタヤと新稱する。イタヤカヘデの一型である。

479) サルナシの葉柄と葉身の主脈に鐵锈色の毛の密生するのはサビサルナシの名で朝鮮產として知れて居たが昨年池上義信氏は越後で採集した。日本列島では始めての發見である。

480) ムラサキリウキウの自生は今迄知られて居なかつたが昨年伊延敏行氏は阿波名東郡眉山で發見した。

481) キタゴウアザミ(新種)。宮崎縣南那珂郡北郷村の草地で筆者自身發見採集したものであるがノアザミ群の一種で莖に毛の多い事はオキナアザミの様であり花時に根出葉があり莖葉と共に多數の整つた裂片が後方に反轉して出る。

482) ツクシニガナ(新變種)。ホソバニガナに似て根出葉は匙狀倒卵形、莖葉は幅5mm以上基に向ひ細まり無柄である。薩摩、日向、肥後、肥前等にある。ホソバニガナでは葉幅4mmである。北村氏の *Ixeris Makinoana* は二型を含む一は眞のホソバニガナであり一は其に似て葉脚が少しく莖を抱くものである。本島と四國とにある。アヒニガナ(中間型のニガナの意)と假稱して置く。

483) ハンクワイサウを *Ligularia* 屬に入れるなら *Ligularia palmatifida* (S. & Z.) なる新組合せが必要である。

484) サハヲグルマに全然毛がないか花莖の先に僅かに毛のあるものが宮崎縣にある此をアオサハヲグルマといふ。

○ボゴル植物園產の發光菌類(佐藤正己) M. M. SATO: Notes on the luminous fungi found in the Botanical Gardens, Buitenzorg.

小林義雄博士が最近發表された論文\*を拜見すると、ボゴル植物園で1902年4月にProf. Volkens が採集した標本によつて Hennings が記載した *Mycena illuminans* P. Henn. が、パラオ島特產の *M. bambusa* Kawam. と共に *M. cyanophos* Berk. et

\* 小林義雄: 發光菌の日本に於ける新分布及びその近縁種に就いて、國立科學博物館研究報告 26:13-19(1949)

Curt. の異名とし整理されている。

専門外の筆者がこれに蛇足を附することは失禮なことであるが、原産地の植物園で自ら観察して來たと云う點でお許を願いたい。

1945 年の 2 月頃と思うが、昭南博物館 (Raffles Museum, Singapore) の羽根田彌太博士が發光菌の採集に來園されたので、折柄の暗夜を利して腊葉館長の金平亮三先生と筆者と 3 人で園内を歩き廻つた。そして傘の光るもの 3 種、胞子だけが光るもの 1 種、菌糸の光るもの 1 種を得た。この中に問題の *M. illuminans* があつたことは勿論である。

原記載によると產地は Java, Hort. ad truncos *Calami* であるが、これは恐らく植物園本部（舊園長官舎）から通用門に出る大道の曲り角にあたる第 12 地区の C 小區にある籐 (*Calamus* spp.) を指すもので、40 餘年後の當時でも Prof. Volkens が見たと同様の姿で残つていたものと思はれる。この小區は籐のひどいジャングルなので園丁も落葉拾いに餘り入らぬで腐殖質に富み、發光草には恰好の生育地である。原記載の前文を見ると、まるでクリスマスツリーにロウソクをともした様だとあるが、正にその通りで、地際に最も多く生ずるが、高さ 1 米位までも疎に生ずる。その光はやや緑色を帶び、傘の徑が 1 梗内外なので、適當な間隔を保つて 2 個だけある場合には丁度虎か豹の様な猛獸が物蔭にひそんで獲物をねらつているのかと、思わずギョッとする位である。植物園勤務の若い日本人職員もある夜遅く此處を通りかかつた時ギョッとして思わず立ち止つたが、さつぱり動く氣配もなく、だんだん落着いて見ると同じ様に光るものがあちこちにるので、さてはこれが筆者の語つた發光草かと考えつき、胸をなで下したと翌朝出勤早々に筆者に報告したことがあつた。

この發光草は傘の表面に多量の粘質物を分泌しているので、筆者はネバリヤコウタケ（粘り夜光草）の和名を與えた。そして更に搜し廻つた結果、半ば腐朽した種類不明の潤葉樹で作つた杭にも發生しているのを採集した。

羽根田博士は採集品を昭南に持歸り、昭南植物園 (Botanic Gardens, Singapore) に軟禁されて居た前副園長の Dr. Corner の同定の結果を報告して下さつた。それによると *M. illuminans* と *M. bambusa* は同一種であると云うことで、この點は小林博士の御意見とよく一致する。

ネバリヤコウタケや他の發光草、ジャバ海産のイカや魚類から分離した發光細菌類、バンダ海に多い發光器を持つ魚類、ジャワに普通に産する光るヤスデの類や昆蟲の幼蟲など、光る生物に関する筆者の知見をまとめた半通俗的な論文をジャワ新聞發行の月刊雑誌新ジャワの 1945 年 8 月號に出したが、校了になつたままで終戦のため出版されずに終つた。死兒の齢を數えるに似ているが、小林博士の論文を見て思出した事を少し書かして載いた次第である。